特42
459

兼平

22

東京圖書館

和書門	音楽類	函	四七	架	一六一	號	一一〇	冊

東京帝國大學圖書之印

第三

為ちく様を信濃路やぐくず曽乃
日きへ木曽の山家
行法を書き

ちりぬる僧をて作ぬ梅を木曽殿へ
ぐ物ぬ[illegible]う承るく是ひたる由
野ぬ狂よ俳諧師を呼ひやさうやと
杉ひ[illegible]人今栗津う原へと意作

信濃路やきそ乃かけ橋なとハあやふ
く其跡とてや道の辺乃草の陰
かゝり桃なと童はつ日を添てゆ
きハ猶あしき江路や矢橋の浦よ出
まさりく　世業をさうきを
すよつ舟を渫ふやたぬもちよへざる
流れあらく其船よ便船しも行

此よ　是ハ山田矢橋乃渡し舟まて
もあし流之人来積たる舟まて猶
よ便船を得ひまし　ことも渫舟
とゐ申て之者折節渡しよ舟もあ
其世家取るまて之ハ分乃便利益よ舟
を渡してこ見ひ　其ひも出家乃店
かあれなよの人よハ替りまし　守人店

經ふる所の歳得紅　早上　身物えうる樣行
ひられ　かゝるもの　イロ　江の海の
二人上　矢橋を渡る舟あり　中　元　下　ふそれの樣の海
上第四　舟也　見いまゝ　上元　浮世をわたる業舟
ひゝ　ずきれぬ袖をうゝき　下元　掉れ　ヤヲ　ぬ
きあ人なれと法の人なてまゝ　ルル　をを
ルル　紅を　ひて情も　ひへきくくめされ

三下　早自　久久　如行よ紅顔殿よりへきゝ
ぶ　商ひ　当る　南山　皆名　有　ふて
作らを　歳久　ニテ　さを　皆名　有　ふて
ぶ　尋久　数中　早　先　夜ひよ　當て　ニテ
大山乃みてはは　数山　ひ　ひく　紙
き社比　数山　ふて　久　櫛よ　山王二十一社
ぶきり　乃　尋　八王寺ぶ　津坂寺

八人家を破却みて山 「キ」 梅の乃
比叡山ぶ城をうつ当りて山
よ却 「シテ」 中くの事ち科山ぶ城
乃鬼門を守り悪魔を払のこ有し
一仏乗乃界と申ハ伝ぶ鷲の大山を
かりとれ今ぶ天台山と号ハ震旦の
四明の洞をうつ傳教大阿闍梨
天王と号をうつ乃ち上て匠暦年
中乃御世ぶ釣我うつ淋と詠ぶ
し根本中堂乃山上匠破れ
て仏 「号ヲ」 拙く大宮乃御在所をうつ
と少んもご乃坂ぶ成ぶうて仏う
「シテ」 ぶ人樹ち當てガこうき陰
つみて仏ぶ宮乃御在所を殿

て法入る方経や一切衆生悪有
仏性衆生の所説に繋かるなども頼を
生ず猛人作入ることく佛衆生通
ものなれば僧も我も隔なく
一仏乗の峯よりさきやあの梢を
あつ人謙は止観蒼海を渡へ
亦和宝恵入三学をうを三塔と

あつけ人ものは一会三乗の機
を顕して三千人の衆徒をさ圓
融の法も曇なき朝の横川をみし
宮りや拝し麓は坂本志賀辛崎
の一松七社の神興乃法華の精所へ
しかり浪をあり棹をかまへ漕
遠ざかる向乃浪乃蒙津の

森さちく成て弘法きの清水の首
おうこれ山掛の者ぜまして面影を夏
山のうつりやまき海の蓮永の志ハく
も眠る情きちりあるへ入よきよく
蘭きの葉ぜ草くさりくさりく
露をの數寄遠でくまも暮長り
も明りへ葉ぜ風乃風蓮世のおさ

陰いさや昂ちんく　白又ほの
を研ぎ者ぎ眼睛やり紅波たて
を流をようかひ龍よ孤花を乱と
雲水乃葉津の風乃卯月よ　ときつ
ちりそよ聲くよ　修羅乃ちゑたき
ざハうや　ちきやお葉津の原乃
草松よ甲冑を苔しみ苔よ苔ぬ乃

流人みてまゐ風をとう（シテ）　まうこと事
なりぬ御方見送り給ふ（ワキ）我おも
ふ心をとりし為乃ばゝ指みてまゐ風
さしや義孝見送（ワキ）と申
ぞ空即義孝にべうの世界なり（シテ）
備き夢みて有此浦（シテ）　いや今みる夢
つゝう現みもたやをあまき掉の音みて

なりぬ（ワキ）はや早く舟長漕ぎりや（ワキセル）
きやあみてみそ（シテ）とは笑橋の浦の渡
寺乃（シテ）　其方人（ワキ）こそ義孝の現よみて
こそ海部の（ワキ）はまき人弘めよりの様なる
人とみてつゝ梅の花毎人へ（シテ）毎人
みもあるし（ワキ）　漁夫みも（シテ）あるぬ（上ニ）　武
士乃矢橋の浦乃渡寺笑橋乃浦

渡し守とぞ、
我ら同數
乗合せざば法の舟よりこそ我をま
たば彼岸よりこそ先も給ぬや
宮や有為無常の世のちまい対して
ろやし者なりつく前は不同夢幻泡
影にぞ行きぬる
明日は擅花一日の栄
ぎ馬乃家よりを月のどうよ弱る

兵乃ゼ弱と呼ぶ水曾殿名乗り
路よりアまり
義平御田ヶ原まりの
ひて又三百人事達ゑ弱ゑ成ぬ
そうち合
戦をひくまて又主従二騎ようらぶ
さまざまの力あり
御腹召れと義平すめやきを心
わうをも生後二弱ぞ葉津乃松原

して薩摩守久世大和守義孝やうばよりの
使敵大勢みて迯かきり防矢仕
とて跡の手繰を迯をば不曾殿御被
官まつ八郎左衛門敵を乃打て迯
一所よりうやう乃所為なる故
とて打〳〵うへし給へば義孝亦ア
様ごへ帰きは詞ばかりすると不曾殿

ば人手なかりしかば家代乃御
御厨所は自害者へしと井もやうて
手疵とうの毒卒よいさめられひつを
し薩摩守抱をなよ不曾殿ばほそ
ものも言〳〵一旗雲乃風吹あ
ぬる松永さして薩摩守上ヒテ
乃来つゝ雲めるさなるう寒うるび叡

の山風乃雲ゆく空もくれなゐなるかなあや
しや通路乃末たゝる空のうち氷深田
より馬をかき出すくるしきをいとうて
ものいうぬら月乃ぬかるみを見て
はうそてを行とあるん方も呆ぎん方も
あくあらんはさく此まゝ自害をせや
とて刀乃手を掛ひ〻ぐらをそ
義平ゆるゆるいとまを方の給をも
久しと給へはいつくよりきりきん今
う命はつきの号の矢をうち放てうち甲
よかりとしおもてまゝ世へ
たまりもあつし馬よりおりてそ乃
ちとあるゝ所へ宮そて我よりもと生君の
御をとゝ吊ひて言へ給へ　吉手花
実痛

りき和漢蕪辛の市家朝を行ふ
あり分給ひきる　魚辛かくそも
ぎつて戦ふ其陸はるもぎ宮殿の市侍を
ぶよかくるうりあり　梅を侍ふ思ひ
も献の市ふ色高て　不覚故うれ
給ひ思と　よりて聲をぶすうを
今は行を朝を人きと　思ひ宮て魚

辛を　見そ家朝の臺言と　鐙ふ
もり　大音為は不曾殿の市内は
今井の四郎魚辛とおのりかきて
大勢よりつくいき　大ぶよりて　跨當
千の秘術を顕し　大物を業ぶの市
よ后つくく儀うの浪ぎりきり
蛟手十文字よ打破りかき通つて其

は指害乃手本よとて太刀もよく
つくしき舞よちくてつかぬれから扮
みまりがねひらい家後乃まき月を
打とろうひあうき舞ありく

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛

明治十七年三月六日翻刻御届
同　年四月十二日別製本御届

翻刻人　京都府平民　寺田熊次郎
下京區第五組麩屋町
錦小路上ル梅屋町十三番戸

定價四錢